

 労協連だより

古村 伸宏

秋から冬にかけて、集会・イベントが目白押しとなる。そのトップを切って、「全国よい仕事研究交流集会」が、9月22・23両日行われた。今回のテーマは、「働く者・市民の協同による、豊かな生活圏の創造～協同労働のよい仕事が、地域を創り、社会を変える時代へ」だった。各地域別の集会を経て、選りすぐられた70本の報告を19の分科会に散りばめた2日目の分科会には、会員研究者の方々にも、多数コメンテーターとして参加頂いた。

ここ数年、「よい仕事」の捉え方や課題が、「仕事おこし」を焦点化してきた。また、今回は「全組合員経営」「社会連帯経営」の強化・創造も、重要なテーマとなった。協同労働にとって、「よい仕事」と「みんなの経営」は、生命線である。この生命を磨く中で、持続と発展の可能性が広がる。しかし、その形成プロセスは決して平たんではない。それは、働く者の内面にある価値観や欲求がぶつかり合うからであり、これを避けて生み出される仕事は、決して持続と発展の可能性が十分ではないことが多い。そこに「よい仕事」の物語があり、人間の育ちと人間関係の発展が色濃く映し出されるのである。その中から、普遍性や社会性を見出すことが、この集会の大きな使命である。

震災以降、こうしたテーマは「社会を創り直す」「関係を結び直す」ことに通ずる「よい仕事」を鮮明にしている。協同労働が地域をつくり、社会を変えることに適う「よい仕事」論の高まりであり、社会連帯を必然と

する「よい仕事」の実態化である。苦闘と格闘の中から、社会を変えることに足を踏み出そうとする協同労働の「よい仕事」こそ、最大の研究テーマとして当研究所も位置づけを高めてほしい。これ抜きに、FECや様々な仕事おこしの本質、そして制度や法制化の意義は見えない、というのが実践家からの訴えである。

全体会では、優れた実践交流だけでなく、外部からゲストをお呼びし、仕事おこしが結びつきやコミュニティをつくる、というテーマを深め合った。今回は、銀座ミツパチの田中淳夫さんと、滋賀県・油藤商事の青山裕史さんとの鼎談を行った。大都會の銀座で始まった養蜂がどんな物語やつながりを編み出したのか、原発からエネルギーを考える機運が高まる中、廃食油からBDFをつくる取組みがどんな地域経済の活性化と循環化に向かおうとしているのか、というお話に刺激を受けた参加者は圧倒的に多かった。共通するのは「やってみる」「楽しさやうれしさ」「巻き込み合うネットワーク」といったことで、我々の仕事おこしの硬さや狭さを刺激された。そして、仕事をつくる面白さと広がるつながりが、働く者の労働観を豊かにする。こうした人々とつながり、協同労働運動はまた、新たな物語を編む。しかしこの物語は、その始まりを紐解きながら編むという、歴史的な営みとなる。何のために・誰のために「よい仕事」と「協同労働」は必要なのか、という歴史的経過が、今の時代にこそ共有されなければならない。